

オーブン カレッジ

現在、金融分野は大きな変貌を遂げつつある。こうした中で、これまで通説と理解されてきたものを、賞味期限が過ぎていくにもかかわらず、再検証することなしに受け入れてもよいのだろうか。

時々刻々、状況が変わっているにもかかわらず、過去の見方・分析に引き摺られたり、先入観でものをみることがしばしばある。これは、昨年ベストセラーとなったハンス・ロスリング著「ファクトフルネス」でも指摘されているが、目下激変中の金融分野でも多く

日本金融の誤解と誤算

さらに一つ指摘しておきたいのは、我々が有するものの見方におけるバイアスとは言うまでもないであろう。例えば、1997～98年のわが国でのクレジット・クラッシュや2008年のいわゆるリーマンショックにおいては、市場参加者が疑心暗鬼となり、全く関連のない金融商品の市場にまで影響が出たり、短期金融市場が機能不全になるといったことを経験した。

その後、危機が収束し、人々の記憶や感情が薄れるとともに、正常性バイアスやパターン化思考を背景に都合よく事象が再構成され、重要な事実が置き去りにされた。加えて、過度に樂觀的な見方が支配する状況もしばしば窺われた。わが国において同調圧力が強いことが、こうした現象に輪をかけたケースも見受けられる。

我々が「通説」と認識している見方は、過去にその問題が世の中でプレイアウトされた当時のバイアスを含んでいるため、実際に最新のデータを使って客観的に検証すると、実は妥当性が失われていることがよくみられる。それが新たな「誤解と誤算」につながる可能性もある。これらを踏まえれば、「通説」は、データを駆使して科学的な分析

することによって定期的な見直しを行うのが必要なのは言うまでもないであろう。こうした問題意識を背景に、この7月に勁草書房より11人のメンバーによる論文集「日本金融の誤解と誤算」を上梓した。とりあげたテーマを列挙すると、日本銀行の非伝統的金融政策の効果はどう評価できるのか、わが国の財政赤字拡大と金融緩和は日本経済の停滞感を払拭できたか、2000年代初めまでの金融危機対応への再評価、銀行の自己資本はどのように決まるのか、銀行店舗数の減少により銀行業の競争度は低下したのか、東アジアの経済発展を支えたのは資本市場なのか銀行なのか、日本の富裕層はどのような資産選択行動をとっているのか、日本銀行のETF購入政策は成功したといえるのか、終戦前後に株式市場に断絶が生じていたのか、と多岐にわたる。

本書では、金融政策・金融システムなどを主たる分析対象としつつも、金融の歴史、資産形成の問題、国際比較など現在の重要問題を考えることにつながる論考も含めて、広く「通説」について再考することを試みたつもりである。学術・実務両面からのアプローチにより、日本の金融の誤解や問題点を全般的に浮き彫りにすることを狙っている。紹介したテーマに興味を持たれた読者の方々に、ぜひ一読をお願いしたい。

過去の通説を 疑い検証する

の事象について当てはまることになる。私たちの頭に刷り込まれた「通説」は、より丹念に、データや事実関係に基づいて絶えず再考しないと誤解や誤算につながりかねない。



植林 茂
山女学園大学
現代マネジメント学部教授

うねばやし・しげる 金融。埼玉
玉大学大学院経済科学研究科博士
後期課程修了。博士(経済学)。